

日语学习文选

(第一集)

商务印书馆

日 语 学 习 文 选

(第 一 集)

尚 永 清 等 編

日語学习文选

(第一集)

尙永清等編

商 务 印 书 馆 出 版

北京复兴門外翠微路

(北京市书刊出版业营业許可証出字第 107 号)

新华书店北京发行所发行 各地新华书店經售

京 华 印 书 局 印 装

統一书号: K9217·460

1964 年 8 月初版

开本 787 × 1092 1/32

1964 年 8 月北京第 1 次印刷

字数 110 千字

印张 4

印数 1—21,750 册

定价 (10) 0.50 元

編 者 的 話

这本文选是以日語专业三年級以上的学生或具有同等学力的自修者为对象、作为精讀的課外讀物而編輯的。本书收集了八篇文章，每篇文章都分为四个部分：原文、作者作品簡介、注释和譯文。原文部分的选材有短篇小說、随笔、杂文，也有长篇小说的选段。每篇最长不超过五、六千字，原文中的汉字，一律加注了讀音。作者作品簡介部分，簡略地介紹作者的概况、作品的主题、时代背景和文字的特点等等。注释部分，以解释較难的語法現象、句子結構为主，也适当地注释了單詞的詞类、詞尾变化和詞义。譯文力求尽量与原文貼切，目的在于帮助讀者理解原文。

讀者在閱讀文选时，可以首先看一看作者作品介紹，然后参照注释来閱讀原文，同时也可以自己制成一份生詞表。这样对原文有了初步理解之后，再把原文与譯文逐句对照精讀，进一步加深对原文的理解，以逐步提高閱讀能力。

我們編注这样一本日語学习用的文选，还是初次尝试，由于我們的水平有限，不仅在注释和翻譯上难免錯誤，即便在选文和注释的深淺程度上，一定也有很多缺点。希望讀者多提意見，以便今后改进。

編 者

目 次

《母亲》	小林多喜二著	(金中譯註).....	1
《馬》	德永直著	(万叶、金瑞譯註).....	20
《猪的歌》	高倉輝著	(陈文彬譯註).....	44
《延长的跑道》	中本隆子著	(司葆光譯註).....	55
《牵牛花》	志賀直哉著	(尚永清譯註).....	69
《千曲川随笔》	島崎藤村著	(姜晚成譯註).....	77
《山椒大夫》	森鷗外著	(魏敷訓譯註).....	87
《浮云》	二葉亭四迷著	(尚永清譯註).....	99

母 親

こはやした き じ
小林多喜二著
金 中 譯 注

すやま ほろ ようじ ときどき ははもや
須山はそっちの方に用事があると、時々私の母親のと
ころへ寄った。そして私の元気なことを云い、又母親のこと
を私に伝えてくれた。

私は自分の家を出るときには、それが突然だったの
で、一人の母親にもその事情を云い得ずに潜るざるを得 5
なかったのである。その日は夜の六時頃、私は何時ものレン
ラクに出た。私は非合法の仕事はしていたが、ダラ干の組合
員の一人として広泛な合法的場面で、反対派として立ち働
いていたのである。ところが六時に合ったその同志は、私と
一緒に働いていたFが突然やられたこと、またその原因は 10
ハッキリしていないが、直接それとつながっている君は即
刻もぐらなければならないことを云った。私は一寸呆然と
した。Fの関係で私のことが分るとすれば、それは単にダラ
干組合の革命的反対派としてでは済まない。オヤジの関係
になるのだ。私は一度家に帰って始末するものはして、用 15
意をしてもぐろうと思い、そう云った。それだけの余裕はあ
ると思った。するとその同志は(それがヒゲだったのだが)

“冗談も休み休みに云うもんだ。”

と冗談のように云いながら、然し断じて家へは帰って

- 20 はならないこと、始末するものは別な人を使ってやること、
着のみ着ままでも仕方がないことを云った。“修学旅行で
はないからな”と笑った。ヒゲは最も断乎としたことを、人
なつこさと、一緒に云い得る少数の人だった。彼は、もぐっ
ている同志がとうとう行く処がなくて、“今晚はよもや大
25 丈夫だろう”と云うので自分の家に帰り、その次の朝つか
まった話や、大切なものを処分するために、張り込んでいる
危険性が充分に考えられる理由があるにも拘らず、出掛
けて行って捕まったという例を話した。彼はあまり、どうし
てはいかぬとは云わない。そんな時は、それに当てはまる例
30 を話すだけだった。色々な経歴を経て来ているらしく、そん
な話を豊富に知っていた。

- 私はヒゲから有り金の五円を借り、友達夫婦の家に
転げこんだ。——ところが、次の朝やっぱり私の家へ本庁
とS署のスパイが四人、私をつかむためにやってきたそう
35 である。何も知らない母親は吃驚して、ゆうべ出してから未だ
帰らないと云った。すると、その中で一番“偉そうな人”が風
を喰らって逃げたのかな、と云ったそうである。

- 私はそのまま帰らなかったのである。それで須山が
私の消息を持って訪ねて行ったときは、あたかも自分の息
40 子でも帰ってきたかのように家のなかにあげ、お茶を出し

で、そしてまずまじまじと顔を見た。それには弱ったと須山は頭を搔いていた。彼は私が家を飛び出してからのことを話して、それが途切れたりすると、“それから？それから？”とうながされた。母親は今まで夜もろくに寝ていなかった。それで眼の下がハレぼったくたるんで、頬がげっそり落ち、見ていると頭ががくがくするのではないかと思われるほど、首が細くしなびていた。

終いに、母親は“もう何日したら安治は帰ってくるんだか？”と訊いた。須山はこれには詰ってしまった。何日、然し今にもクラクラしそうな細い首をみると、彼はどうしてもほんとうに本当のことが云えず、“さア、そんなに長くないんでしょうな……”と云ってきたという。

私の母親は、勿論私が今迄何べんも警察に引っ張られ、二十九日を何度か留置場で暮すことには慣らされているが、殊に一昨年は八カ月も刑務所に行っていた。母親はその間差入に通ってくれた。それで今ではそういうことではかえって私のしている仕事を理解してくれているのである。ただ何故今迄通り、警察に素直につかまらないのが分らなかった。逃げ廻っていたら、後が悪いだろうと心配していた。

私は今迄母親にはつら過ぎたかも知れなかったが、結局は私の退びきならぬ行動で示してきた。然し六十の母親が私の気持ちにまで近付いていることに、私は自分たち

- がこの運動^{うんどう}をしていく困難^{こんなん}さの百倍^{ひやくばい}もの苦しい^{くる}心の闇^{こころ たたか}い
 65 を見る^みことが出来る^{でき}気がする^き。私の母親^{おののぼろ}は水吞^{みずのり}百姓^{ひやくしやう}で、小
 学校^{がっこう}にさえ行^いっていない。ところが私が家^{うち}にいた頃^{ころ}から“い
 ろは”を習^{なら}い始^{はじ}めた。眼鏡^{めがね}をかけて炬燵^{こたつ}の中に背^{なか}中^{せなか}を円^{まる}くし
 て入^{はい}り、その上^{うへ}に小^{ちい}さい板^{いた}を置^おいて、私の原稿用紙^{げんこうようし}の書^かき散^ち
 らしを集^{あつ}め、その裏^{うら}に鉛筆^{えんぴつ}で稽古^{けいこ}をし出^だした。何^{なに}を始^{はじ}めるん
 70 だ、と私は笑^{わら}っていた。母^{はは}は一昨年^{いつさくねん}私が刑務所^{けいむしょ}にいるとき
 に、自分^{じぶん}が一^{いち}字^じも字^かが書^{てがみ}けないために、私^{わたし}に手紙^{てがみ}を一本^{いつぽん}も出
 せなかったことを“そればかりが残念^{ざんねん}だ”と云^いっていたこ
 とがあつた。それに私が出^でてからも、ますます運動^{うんどう}のなか
 に深入^{ふかい}りしているのが母^{はは}の眼^めにも分^{わか}つた。そうすれば今度^{こんど}
 75 もキット引張^{ひっぱ}られるだろう、又^か仮^かりにそんなことがないとい
 しても、今^{いま}は保釈^{ほしやく}になっているのだから、どうせ刑^{けい}が決^きま
 れば入^{はい}るのだから、その時^{とき}の用意^{ようい}に母^{はは}は字^じを覚^{おぼ}え出^だしてい
 るのだつた。私が沈^{しず}む少し前^{まえ}には、不揃^{ふぞろ}いな大^{おほ}きな字^じだつた
 が、それでもち^よんと読^よめる字^じを書^かいているのに私は吃驚^{びっくり}
 80 した。——ところが、母親^{おののぼろ}は須山^{すやま}に“会^あえないだろうか?”と
 訊^きいて、さア会^あわない方^{ほう}がいいでしやう、と云^いわれると、“手
 紙^{てがみ}も出^でせないでしやうねえ”と云^いつたそうである。私はそれ
 を須山^{すやま}から聞^きいたとき、そう云^いつたとき母^{はは}の氣持^{きもち}がジ
 カに胸^{むね}に來^きて弱^{よわ}つた。
 85 須山^{すやま}が歸^{かえ}るときに、母親^{おののぼろ}は袷^{あわせ}や襦袢^{じゆはん}や猿^{さる}又^{また}や足袋^{たび わた}を渡
 し、それから彼^{かれ}に歸^{かえ}るのを少^{すこ}し待^まって貰^{もら}つて、台所^{だいどころ}の方^{ほう}へ

行った。暫らく其処でコトコトさせていたが、何をしている
のだろうと思っていると、卵を五つばかりゆでて持ってきた。そして卵は十銭に三つも四つもするのだから、新しい
のを選んで必ず飲むように云ってくれと頼まれた。私はそ
の“うで卵”を須山や伊藤などと食った。“な、伊藤、俺等一
つでやめよう。後でおふくろにうらまれると困るから”と須
山は笑った。伊藤は分らないように眼を拭いていた。

その後須山が私の家に寄るときに、私は四年でも五年
でも帰られないことをハッキリ云ってもらうことにした。95
そして私を帰られないようにしているのは、私が運動をし
ているからではなくて、金持ちの手先の警察なのだから、
私をうらむのではなくて、この倒さになっている社会をう
らまなくてはならない事を云ってもらうことにした。うや
むやのことより、ハッキリしたことが分らせれば、かえって 100
そこに抵抗力が出てくる。それに、私の知っている仲間が
警察につかまって、それが共産党に関係があると云われる
と、残された家族の妻とか母親とかが、私の夫とか息子に
はそんな“暗い陰”が無いとか、“罪にひっかけようとして”
共産党だなどと有りもしない事実を云っているのだとか、 105
そんなことを云っていたものがあつた。だが若しもそうだと
すれば、共産党というものは“暗い影”であり、又共産党
なら罪にひっかけてもいいのだということを、これらの仲
間の残された人たちが自分の口から云っていることにな

110 る。私は、六十の母親だが、私の母親がそれと同じように考
え或いは云ったりしてはならないと思^{おも}った。私の母親はそ
の過去五十年以上の生涯を貧困のどん底で生活してき
ている。ハッキリ伝えれば、理解出来^りかと思^{おも}ったのである。

須山によると、私の母はそれを黙^{だま}って聞^きいていたそう
115 である。そしてそれとは別^{べつ}に、自分^{じぶん}は今六十だし、病^{びよう}気^き
もすれば今日明白にも死ぬかも知れないが、そんな時^{とき}は一
寸でも帰^{かえ}って来^きてくれるのだろうか、ときいた。須山はそん
なことは予期もしていなかったの^{ので}、どう答^{こた}えていいか分
らなかつた。私は後^{あと}で、そういう時^{とき}でも帰^{かえ}れないのだ、とい
120 うことを云^いってや^やった。

“オウそんなこと云^いえないや!”

と須山が困^{こま}った顔^{かお}をした。

私はこれらのことが母親には残酷であるとは思^{おも}わぬで
もなかったが、然^{しか}し仕^{しかた}方^たのないことであるし、それらすべて
125 の事^{こと}によって、母の心^{こころ}に支配階級^{しはいかいきぎゅう}に対する全生涯^{ぜんしやうがいてきざう}の憎悪^お
を(母の一生^{いつしやう}は事実全^{じじつまつた}くそうであ^いった。)抱^{いだ}かせるために
も必要^{ひつよう}だと考^{かんが}えた。それで私は念^{ねん}を押^おして、私が母の死目^{しにめ}
に会^あわないようなことがあるのも、それはみんな支配階級
が、そうさせているのだということを繰^くりかえすことを頼^{たの}
130 んだ。——だが、さすがにその日私は須山と会^ひう時^{とき}には、胸^{むね}
が騒^{さわ}いだ。

“どうだった?”

と訊いた。

“こう云ってたよ——”

私の母はこの頃少し痩せ、顔が蒼くなっているらしいか 135
った。そして一度会えないものか、どうかときいたというの
だ。

私はフト“渡政”のことを思い出した。渡政が“潜”った
とき、彼のお母さんは(このお母さんはいま渡政ばかりでな
く、全プロレタリアートのお母さんでもあるが)”政とはモ 140
ウ会えないのだろうか”と同志の人にきいた。同志の人たち
は“会えないのだ”ということをお母さんに云ったそうであ
る。で、私はそのことを須山に云った。

“それは分るが、君の居所を知らせるわけでなし、一度
位 何処かで会ってやれよ。” 145

実際に私の母親の様子を見てきた須山は、それにつま
まれていた。

“が、それでなくても彼奴等は俺を探しているのだから、
万一のことがあるとな。”

が、とうとう須山に説き伏せられた。充分に気をつけ 150
ることにして、何時も私達の使わない地区の場所を決め、自
動車で須山に連れて来てもらうことにした。時間に、私は
その小さい料理屋へ出掛けて行った。母親はテーブルの向
う側に、その縁から離れてチョコンと坐っていた。浮かない
顔をしていた。見ると母はよそ行きの一番いい着物を着て 155

いた。それが何んだか私の胸にきた。

私たちはそんなにしゃべらなかった。母はテーブルの下から風呂敷包みを取って、バナナとピワと、それに又“うで卵”を出した。須山は直ぐ帰った。その時母は無理矢理に

160 卵 とバナナを彼の手握らしてやった。

少し時間が経つと、母も少しづつしゃべり出した。“家にいたときよりも、顔が少し肥えたようで安心だ”と云った。母はこの頃では殆んど毎日のように、私が痩せ衰えた姿の夢や、警察につかまって、そこで“せっかん”(母は拷問

165 のことをそう云っていた) されている夢ばかり見て、眼を覚ますと云った。

母は又茨城にいる娘の夫が、これから何んとか面倒を見てくれるそうだから安心してやったらいいと云った。話がそんなことになったので、私は今迄須山を通して伝え

170 てもらっていたことを、私の口から改めて話した。“分ってる”と、母は少し笑って云った。

私はそれを中途で気付いたのだが、母親は何んだか落着かなかった。何処か浮腰で話も終いまで、しみり出来なかつた。——母はとうとう云った。お前に会う迄は居ても

175 立ってもいられなかつたが、こうして会ってみると、こんなことをしている時にお前が捕まるんじゃないかと思って、気が気でない、それでモウそろそろ帰ろうと云うのだった。道理で母は時々別なテーブルにお客さんが入ってくると、

その方を見て、“あのお客さんは大丈夫らしい”とか、又別
な人が入ってくると、“あの人は人相が悪い”とか云ってい
た。私がかえって知らずに家にいた時のような声でものを
しゃべると、母がもう少し低くするように注意した。母は、
会っていて、こんなに心配するよりは、会わないでいて、お
前が丈夫で働いているということが分っていた方がずっ
といいと云った。

母は帰りがけに、自分は今六十だが八十まで、これか
ら二十年生きる心積りだ、が今六十だから明白にも死ぬ
ことがあるかも知れない、が死んだということが分れば矢
張りひょっとお前が自家へ来ないとも限らない、そうすれば
危いから死んだということは知らせないことにしたよ、と
云った。死目に遇うとか遇わぬとかいうことは、世の普通の
人にとってはこれ以上の大きな問題はないかも知れぬ。し
かも六十の母親にとっては。母がこれだけのことを決心し
てくれたことには、私は身が引きしまるような激動を感じ
た。私は黙っていた。黙っていることしか出来なかった。

外へ出ると、母は私の後から、もう独りで帰れるからお
前は用心をして戻ってくれと云った。それから、急に心配
な声で。

“どうもお前の肩にくせがある!”

と云った。“知っている人なら、後からでも直ぐお前と
分る。肩を振らないように歩く癖をつけないとねえ……”

“あ、みんなにそう云^いわれてるんだよ。”

“そうだろう。直^すぐ分^{わか}る!”

母^{わか}は別^{ひと}れるまで、独^{こと}り言^{なん}のように、何^すべんも“直^{わか}ぐ分^るる”

205 を云^いっていた。

私はこれで今迄^{いままで}に残^{のこ}されていた最後^{さいご}の個人^{こじん}的^{てき}生活^{せい}の
退^{たい}路^ろ——肉^{にく}親^{しん}との関^{かん}係^{けい}を断^たち切^きってしまった。これから何^{なん}年^{ねん}
目^めかに来^くる新^{あたら}しい世^よの中^{なか}にならな^ない限^{かぎ}り(私はそのため
に闘^{たたか}っているのだが)、私^{わたし}は母^{はは}と一^{いつ}緒^{しょ}に暮^{くら}すことがないだ
ろう。

【作者和作品簡介】 小林多喜二(1903—1933)是日本最杰出的无
产阶级的革命作家;生于日本北海道的一个貧农家里。从学生时代起,
他就开始从事创作活动。1929年,发表了他第一部中篇小说《不在地
主》。以后他到东京,立即投身于日本无产阶级的文学运动,曾担任过
日本无产阶级作家同盟的书记。他于1931年日本革命运动最困难时期
加入了日本共产党,第二年即被迫过着地下生活,继续领导党的文化
活动。1933年,他被日本警察当局逮捕,遭到严刑拷问,至死不屈。他就
这样在惨不忍睹的非刑之下,为革命事业而英勇牺牲了。在他短促的十
年创作活动和实际斗争中,写出了不少辉煌的作品。其中代表作有
《1928年3月15日》、《蟹工船》、《工厂細胞》、《組織者》、《党生活者》等。
《母亲》选自《党生活者》的一节。这是他的后期代表作品。作者依据自己
地下生活的体验,写一个共产党员舍弃了个人的生活,在反动当局的追
捕下,领导一个軍需工厂工人群众的斗争。他在尖锐的战斗生活中,不
断克服残余的小资产阶级意识,逐渐把自己锻炼成具有全心全意为人
民服务的共产党员的高贵品质。作品形象真实生动、语言清新、朴素、感
人至深。

【注释】

1. そっちの方に——そっち=そちら,有(指示方向)那边儿;(指示所在

地)府上,等意。在文中指的是“母亲”居住的地方。例:そちらの本棚を見て下さい。/請看一看那边的书架。そちらへ伺います。/到府上拜訪。

1. 用事/(应办的)事情或工作。例:ちょっと用事がある。/有一点事。用事をしてから遊ぶ。/做完了事再玩。
2. 寄った,寄る=たち寄る。有靠近,聚集,順便到…,等意。例:もっとそばへお寄り下さい。/請您往跟前湊一湊。子供達が木の下に寄って来た。/孩子們聚集到树底下来了。歸りに友達の家へ寄る。/归途順便到朋友家里。
2. 元気/精力、精神,(身体)健康或结实。例:元気がよい/精神好。元氣をつける。/增加精力。元氣な若者/精力充沛的青年。
3. 呉れる/給(我)。父が私に本を呉れる。/父亲給我书。上接动词連用形时……給我。姉が日本語を教えてくれる。/姐姐教給我日語。
5. 一人の母親/这里意思是“唯一的母亲”。
5. ……ざるを得ない=……なければならない,……しないわけには行かない/不得不……不能不……
5. 潜る/原意潜入,这里意思是潜入地下或轉入秘密状态。
6. レンラク[連絡]联系 聯絡。这里用片假名系表示特殊用語。系指地下工作者的秘密“联系”
7. ダラ干/指黄色工会里的工賊。
8. として/作为……, 以…資格。組合員の一人として/作为工会会员之一。
10. やられた——“遣る”有(一)派去、送去:(二)給与,(三)作,干,搞等意,这里意思“被捕了。”
12. ……なければならない/不得不,不能不,非……不可。
14. 済まない——“済む”/完事,すまない/不能完事,不能解決問題,例:それですむと思うのか? /这样就算完事了嗎?
14. オヤジ——“親父”(自己的)父亲或“老头子”之意,这里用片假名系表示特定人物,是当时的隱語,即党的直接領導关系。
15. 始末する/收拾、整理、安排。
15. 用意/准备、预备。
18. “冗談も休み休みに云うもんだ”。——“冗談”戏言、开玩笑,扯淡。“休み休み”断断续續,不繼續。这里整个的意思是“休开玩笑”
19. ……てはならない/不准,不得。
21. 着のみ着のままで/穿着随身的衣服。例:“着のみ着のままで逃げ出しました。/穿着随身的衣服逃走了。

24. “今晚はよもや大丈夫だろう。”“よもや”是副詞，下接否定或推量助動詞。有未必，不至于，难道等意。例：“よもやそんな事はあるまい。”未必会有那样的事。这里不是日語的規範說法，= 今晚是恐らく大丈夫だろう。/ 今天晚上大概还不要紧吧！
26. 処分する/ 処罰、处理。
26. ……張り込んでる危険性が充分に考えられる理由があるにも拘らず……/ 这句话直譯的意思是：……尽管有充分理由考虑到有暗中監視的危険性……。
28. どうしてはいかぬ/ 如何如何办可不行。こうしてはいかぬ/ 这么办可不行。
29. 当てはまる/ 吻合、适合、恰当、相应。
36. かぜをくらって逃げる/ 聞風而逃。
38. そのまま(副詞)/ 就那样，就这样地，原封不动、仍旧等意。例、そのままでもいい/ 就这样行了。
41. 弱った——弱る/ 有軟弱、困苦、为难等意。例、体が日ごとに弱って行く/ 身体日見衰弱。“何にもよわることはない、私が援助してあげます/ 没有什么可为难的，我来帮助你。
43. 途切れる = 跡切れる/ 中断、停顿。例、雑音のために、電話が時々途切れる/ 因为有杂音，电话时常中断。連載小説は途中で跡切れてしまった/ 連載小説中途停載了。
44. ろくに[碌に](下接否定語)有像样地，很好地，正經地，認真地，等意，下面必定有否定詞。ろくに寝ていなかった/ 没有很好地睡覺。例、碌に考えないで、承諾してしまった/ 没有很好地考虑，就答应下来了。
45. “眼の下がハレぼったくたるんで”——“はれぼったい”紅腫，“たるむ”松弛，下垂。意即眼泡紅腫，皮肉下垂。
45. げっそり/ 驟然消瘦。
45. ……見ていると頭がガクガクするのではないかとと思われるほど、首が細くしなびていた/ 这里直譯的意思是：乍一看，脖子又細又皱，令人想到头会不会搖搖晃晃地支不住。‘ガクガクする’有晃晃蕩蕩，活活动动等意。例、歯が抜けそうだがくがくする/ 牙活活动动像是要掉下来。
49. 詰ってしまった——“詰る”有阻塞、充滿、窘迫等意。例、返答に詰る/ 答不上詰来。
50. どうしても/ 無論如何。どうしても本当のことが云えず/ 無論如何(怎么)也无法說出真话来。